

華僑・華人史研究をめぐる 東南アジアと東アジアの連続と断絶*

濱 下 武 志**

Connection and/or Disconnection between Southeast Asia and East Asia in Overseas Chinese History Studies*

HAMASHITA Takeshi**

In this essay I will introduce and examine recent important works on the history of overseas Chinese and through them I will reassess several major conclusions of scholarship on the regional relationship between Southeast Asia and East Asia. An overview of the field yields three salient characteristics. First, whether the unit of analysis was Southeast Asia or East Asia, groups of countries or nation-states, the scholarship subsumed the migration of overseas Chinese between regions under the country-to-country connection. Second, scholars tried to examine and to define overseas Chinese as those exhibiting so-called core values of Chinese traditional culture, but they did not include social voluntarily activities, inter-regional and global networks, and other vital aspects, especially multilateral local-local, region-region, and local-global networks. Third, the overseas Chinese were treated mainly as a political issue between governments and the migrant Chinese communities, notably as a factor in nation-state building.

Through a reexamination of these conclusions, I shall treat inter-regional relations between Southeast Asia and East Asia as regional networks of overseas Chinese surrounding the South and East China Sea, and I will raise several issues for further investigation in overseas Chinese history studies in Japan, particularly patterns of migration and networks between Southeast Asia and East Asia.

Keywords: inter-regional network, overseas Chinese and Chinese overseas, Nanyang Chinese (Chinese in Southeast Asia), new overseas Chinese policy, globalization

キーワード: 地域間ネットワーク, 華僑・華人・華裔, 南洋華僑と東南アジア華人, 新華僑政策, グローバリゼーション

* 本稿は、2005年9月5-7日に開催された京都大学東南アジア研究所東南アジアセミナー「東南アジアを超えて——華僑・華人研究のフロンティア」における報告「東アジア研究と華僑・華人史——研究動向と新たな課題」をもとに、それを加筆・修正したものである。

** 京都大学東南アジア研究所; Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

はじめに——華僑・華人問題の歴史性

華僑・華人問題は、広い意味において、中国と海外中国系人との関係を指すということができる。とくに、華僑・華人が集中して居住する、南洋や東南アジアと呼ばれる地域においては、華僑・華人問題は、歴史的に見て、時代に応じて、異なった問題の発生の仕方を示しているといえよう。そして、それに応じた、東南アジアと東アジアの地域関係は、断絶したり、連結されたりするという分断と連続の繰り返しを示してきた。中国からみるならば、歴史的には、すでに、古代南海郡の時期に始まり、その後南洋から東南アジアという呼称の変化を示しながら、それらは絶えず、中国の影響下にあるべきものとして位置づけられてきたという側面を持ってきた。そのなかで、華僑という呼称が公式に使用され始めた時期は新しく、19世紀後半から、クーリー移民ではなく、契約移民として移民が合法化されたのちに、広まったといえる。東南アジアと東アジアとの関係の連続と断絶の変化をもたらした要因には、以下のようなものがある。

1. 労働力の供給や資本投下など、華僑・華人の経済力の発展によるもの
2. 華僑・華人に対する、本国政府の政策によるもの
3. 華僑・華人に対する、植民地政府の政策によるもの
4. ナショナリズムのなかで登場する排外的反華僑の動き

これらの動きに応じて、東南アジアと東アジア・中国との関係や距離は、分断され途絶したり、連結が強化されたり、強く謳われたりしたといえる。そして、1990年代以降の中国の改革開放政策以来の経済発展とグローバリゼーションの時代としての現在は、過去数100年間の歴史のなかで前例を見ないほど、本国と華僑・華人の関係は強くかつ良好であるといえるであろうし、現在中国のみならず、中国的な要素が世界を巡回しているという現象も、この華僑・華人問題が大きな役割を果たしているからであると考えられる。したがって、中国・東アジア、さらには、これらの地域関係を考えるときには、この華僑・華人の位置と動きをどのように捉えるか、ということが、きわめて重要になるのではあるが、これまで華僑・華人に関する検討や研究は必ずしも系統的に議論されてはこなかったと考えられる。そして、このことが、現在大きく研究課題の問題としても登場していると見なすことが可能であり、ここでは、以上のような現代的な視点も含めて、華僑・華人研究を振り返りながら、華僑・華人史研究をめぐる東南アジアと東アジアとの地域間関係研究の特徴と課題について考えてみたい〔方金英 2001；劉宏 2002；Wong 2004〕。

華僑・華人研究の現在

ここ数年来、華僑・華人研究は、歴史研究を中心とした領域の中のみではなく、現在進行しつつある中国をはじめとするアジアの政治経済や社会文化の大きな変化の中で、改めて現在の華僑・華人の動きに関する研究が大変活発になっているとみることができる。とりわけグローバル化の動きの中で、中国の改革・開放政策が本格化し、市場化の動きの中で、この変動する中国との関係において、華僑・華人の動きはいっそう加速されているということができよう。加えて、この動きの中で中国の対外政策は、華僑・華人の経済的・政治的・人的な資源を活用するために、積極的に新華僑政策を進め、本国と海外華僑との結びつきを強めている。この傾向の特徴は、中国（史）研究の中においてみるならば、一方では「複合化・総合化・広域化」を示しており、また他方では「現地化・個別地域化」を示すという両極への分岐を示しながら進められているように見える。現在中国で進行する「地縁政治」と表現される「地政的」な広域地域分析は前者の例であり〔庄国土 2001〕、「僑郷」研究といわれる、帰郷華僑についての研究は後者の例であるといえる〔李元瑾 2002〕。

同様に、周辺地域にあっても、開放政策をとる中国の「中華的な」動きに対応した現地「華僑・華人」社会の経済的かつ社会・文化的に積極的に呼応した動きがあり、同時に「中華的」世界内部の政治的な分岐も見られる。このようにして、華僑・華人研究それ自身も、これらの動きに連動した関心とテーマを呼び起こしている。別の見方をするならば、華僑・華人研究は、特定の固定した研究範囲を持つというよりも、時代の変化に応じた研究のテーマと異なる射程を持っているということができると思われる。その意味では、華僑・華人研究の主題は、東アジアをめぐる広域地域の動向に密着し、地域社会レベルから政策レベルまでを含んだ、双方の係わり合い・交渉・競合の中で現れ、また作られてくるものであり、そしてそれらの動きそのものの研究課題のみならず、地域連関に関する基本問題の性格や特徴、問題相互の結びつきを現す「表示盤」ともなっているということになる。その意味で、後に触れるように、現在我々は、グローバル化の動きが、これまでの地域連関に対して与える変化が、華僑・華人問題とその研究に対して持つ影響力の大きさとして現れていることを目の当たりにしているわけである。

ただし、この多様であるということは、直ちに、華僑・華人研究の困難さに直結することを意味している。多様であり、重層的であり、多軸的であり、複合的であり、相互関係的であり、不断に交渉とネットワーク化を繰り返す「華僑・華人状況」とも呼び得る現象は、ひとたびそれを検討し、議論しようとするとき、単に「マルチディシプリン」に、とだけ繰り返してはいられない広さと深さ、そしてなによりも、日々刻々変動する態様に直面する。これまで、華僑

研究は、ひとつの「事情研究」や「動向研究」に留まっていたということも十分頷けるところである。

このように、地域の流動や変動を明らかにしようとする際の地域研究という手法と、流動するテーマや多様な組み合わせを示す華僑・華人のネットワークとを対質させようとする課題は、地域と主題、そして、何よりも重要であると思われることではあるが、比較分析の手法やそれらの総合化の方法とそれに伴う複合的な理念や概念の追求によって、はじめて可能となると考えられる。「華僑」研究は「架橋」研究であると言われる理由もここにあると思われる。

徐斌編『華僑華人研究中文書目』[2003]、徐斌・張長虹編『東南亜与華僑華人研究論文索引』[2002]、周惠民主編『台湾地区館藏華僑華人研究中文書目彙編』[2000]などによると、1990年代以降、華僑・華人研究は急速に増加し、かつ多様化している傾向を見て取ることができる。そして、この傾向は非中国語による研究においても同様の傾向を示しているといえる。本稿は、華僑・華人研究の研究史を「中国」側ならびに「華僑・華人研究者」の視点から検討することを試みようとしているが、この「中国」という概念も、「華僑・華人」概念に似て、単に地理的な中国を指すものではない。「中国」自体が、歴史的に華僑を周辺化する政策の主体であったことと同時に、華南地方を中心とする「中国」は、いわば華僑の故郷に他ならなかったからである。これまで、国家を中心とする制度や組織、さらにはナショナリズムや民族問題を中心に、あるいはそれに対する直接的な反措定として議論してきた人文科学・社会科学の概念や方法、そして手法そのものが例えば華僑・華人問題のように、これまでとは異なっている対象をどの様に捉え、議論するかということが問われている。すなわち、移民や流動そのものを対象として把握する方法は何かということである。従って、本稿における「中国」とは、差し当たり、広い意味において「中国」「中国系人」という視野を指し、その視点から研究史を検討することとしたい。

1. 「華僑的」なるものをめぐって

「華僑」という語彙は、定義づけようとする、絶えず手元から逃れ出て、明確につかませないように姿態転換してしまう語彙であるといえる。この言葉の核心をとらえようとしても、自らを周縁化し、固定させようとはしない。この語彙によって表現させようとする「実態」は、これまで、華僑・華人の歴史と共に古く、その使い方、使われ方をめぐって、極めて微妙な政治的・経済的・文化的な議論が存在していたといえる。とりわけ、国家建設の中で、集権的な国家の枠内には止まらないものとして、内に居りながら外に通じており、同時に極めて強固な内部結合を持つものとして、外部からは計り知れないという捉えられ方が長く存在してきた。中心から見れば、ときには、華僑・華人問題として、事態を周辺化させることによって、局面を転換させるという政策的対象に置かれてきたともいえる様相を呈してきた。このように、絶

えず自己を周辺化しながら、移動性と定着性を併せ持ち、容易には把捉させないという対象は、それを明快な概念規定において理解しようとする自体が無意味であるとさえ言えるかもしれないのであり、むしろこの対象そのものが持つ流動性を方法的にも模写しながら実態に迫るという、遠近両様の、また、硬軟両様の、そして内外両様のアプローチが求められていると考えられる。とりわけ、現代社会にあって、従来の制度や構造が変化し、「非制度」や「非公式」の領域が一層顕在化しようとしており、しかも、その方向が絶えず流動的であるという状況の中で、われわれは、「華僑的」な状況があるがままにそのものとして把握することの重要性を痛感するのである。その点からみるならば、本稿は研究方法の領域のなかに、積極的にこの華僑的状況を取り込めないであろうか、と考える試みであるということになる。

「華僑的」な状況とは、華僑という実在が、歴史的な主体でありながらも、それが、(1) より上位の政治経済的な力学によって「造られた」ものであり、同時にそのような状況のなかで、(2) それを実在のための条件として利用しつつ、主張し発言し、運動するという「自己主張する」華僑であり、(3) さらに、その内部関係にあっては、地縁・血縁・業縁などによってネットワーク化するという、「実存する」華僑であるということである。その意味で、これら三者は、決して一致することなく、それらが相互に矛盾して対抗しあう在りようが、華僑的なものであるともいえる。

このような研究環境のなかで、華僑・華人問題をどのように概念化できるか、また、範疇化できるか、ということが問われ続けてきたといえる。王賡武「華人・華僑と東南亜史」「東南亜華人身分認同之研究」『王賡武自選集』[2002]、また比較的早期の研究である、L. A. Peter Gosling and Linda Y. C. Lim, eds., *The Chinese in Southeast Asia* [1983] は、華僑・華人の活動空間から東南アジアの地域空間を描き出そうとする視角を窺うことができる。

そこでは、用語法が辞書的に吟味され、時間を遡った初源や初出が検討されてきた。たとえば、王賡武が定義するように、華僑・華人は、移民元と移民先における関係の緊密度によって区分されている。しかしながら、資料によってみると、それらはさらに複雑であり、むしろ状況によって、また、主体の位置をどこに置くのかという文脈の違いによって、伝える側と伝えられる側とが明確に意識され、かつ区別された表現であるということも確認できるのである。

2. グローバリゼーションのなかの華僑史研究

近年の現代世界をめぐる時代認識と議論の枠組みにおいて、いわゆるグローバリゼーションの動きをどのように捉えるかという点が問題となつてからすでに何年かが経過しており、また globalizationの問題は決して現在に固有の問題ではなく、すでに歴史的に存在していたという反応も見られる。

そして、この歴史に見る全球化の問題は、例えばその一つの例として、G.E. Hopkins, ed., *Globalization in World History* [2002] として編集され、「全球化の歴史と歴史の全球化」が方法的に問題とされ、そのなかで、古典と近代における全球化の歴史、ムスリムの宇宙観と西洋の全球化、「大西洋」世界における労働、全球主義における帝国・ディアスポラ・言語、などのテーマとともに、近代中国を通して外国人宣教師が描いた全球化が論ぜられている。すなわち、近代中国に導入された、政治経済的、財政金融的な制度や運用が、近代世界においてきわめて世界的な課題意識のもとに行われたことが議論されている。

グローバリゼーションの動きの中で突き動かされた華僑・華人研究の新たな課題は、ディアスポラやネットワークとして、そのつながりや広がりなどの特徴が議論されるに至っている。そして、広域地域統治としての「帝国」のなかの華僑・華人の位置づけをめぐる枠組みが生まれてきた [Ong and Nonini 1997]。

3. 華僑研究の基本的枠組み——労働移動と文化接触

これまで、華僑・華人研究には二つの大きな理論的枠組があった。ひとつは経済学の労働移動の問題、他のひとつは、社会文化とも関係するが、同化政策と同化問題、すなわち移民先社会にどのように定着していくか、その文化接触を通して、どのような摩擦があり、どのような交渉があり、あるいはどのようなアイデンティティが作られるか、という文化接触および同化問題があげられる [Wong 1988; 重松 1986; Chaudhuri 1993]。

その基本的な枠組みの中で、以下のような研究分野が開拓されてきた。

- 1) 政策対象としての華僑……移民政策・国民国家と同化政策
- 2) 自己表出する華僑……馬華文学・華人教育・宗族組織
- 3) 歴史分析としての「解釈された」華僑……苦力・あるいは逆方向の「黄禍論」「脅威論」など
- 4) 多ディシプリンによる華僑・華人の「五縁」(地縁・血縁・業縁・善縁・文縁)研究
- 5) 投資行動や企業経営などの経済・商業活動に関する研究

このように、これまでの華僑・華人研究は、基本的には上記のような異なる領域をめぐる「出自」「起源」をもつものといえるであろう。そして、各項目において、また複数の複合項目において、華僑華人研究は、時代と政策に応じた変化を示してきたのであり、そのなかで、東南アジアと東アジアの地域間関係は断絶と連続を示してきたといえるであろう。以下においては、それらの中からいくつかの論点を選び、既往の研究史の特徴を見ていきたい。

4. ビジネス・ネットワーク

その後、1980年代の後半の経済発展、特に東・東南アジアの四つのスモール・ドラゴンの

経済発展が示されると、華僑・華人の投資・企業経営とビジネス・ネットワークの議論が導き出された。それまでのアルフレッド・チャンドラー（Alfred Chandler）モデルに見られるような、会社組織とマーケットという二者双互間のやりとりの中でコストをいかに削減するか、というトランSACTIONコスト理論からではなく、華人ネットワークによる家族的企業経営の特徴が議論された。つまり、組織と市場の間にそれらを仲介する機能を持つネットワーク的な商業組織、あるいは経営組織をつくり、現実の変化に対応していくという「ネットワーク的な」経営体に対する注目がなされた。このような華僑・華人の経営を、とりわけ東南アジアと華南の間に張りめぐられた投資のネットワーク、経営ネットワークについて、80年代半ばからハミルトン（Gary Hamilton）、黄紹倫（Wong Siu-Lun）、唐志強（Tong Chee Kiong）などが社会学のネットワークの視点と人類学を合体させるかたちで議論を進めた。その特徴は、一般論としての労働移動と同化理論では説明しきれない、新しい経済発展に対応した華僑・華人研究の領域を開いたと思われる。

華僑・華人ネットワーク研究として、Gary Hamilton, ed., *Business Networks and Economic Development in East Asia* [1991], Bahadır Pehlivan, “Small Worlds” of Overseas Chinese: A Network Science Approach, Ph.D. Dissertation, Kyoto University [2003], 古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』[2000], 陳天璽『華人ディアスポラ——華商のネットワークとアイデンティティ』[2001], 濱下武志「交差するインド系ネットワークと華人系ネットワーク——本国送金システムの比較検討」『現代南アジア6 世界システムとネットワーク』秋田茂、水島司（編）所収 [2003]などをあげることができる。

5. アイデンティティとコミュニティー——三縁（地縁、血縁、業縁）・五縁（地縁、血縁、業縁、文縁、善縁）・文化研究

その後、文化研究という特徴が華僑・華人研究のいろいろな面で示された。これは、アイデンティティとコミュニティーの問題として、地縁、血縁、業縁などの三つの結びつきから五つの結びつきへと拡大した。例えば、従来の三つの結びつきに文縁、善縁が加えられた議論である。いわゆる文縁とは、かなり広い範囲を含むが、漢字文化、中国語教育、方言グループなど、文化的活動のつながりを通してネットワークをつくり、華僑・華人のアイデンティティが作られる点が議論された。善縁とは、社会的善挙、つまり奉仕活動などの社会的な活動を通して、今でいうNGO活動も含まれると思われるが、このような自発的な社会活動を通して、華僑・華人のネットワークとそのアイデンティティが作り上げられる。そして、華僑・華人を位置づける範囲もかなり多様になった。これは、文化研究という側面から議論が進められてきた現われであると思われる。華人社会と宗教との関係では、Kiyoshige Maeda, *Alor Janggus: A Chinese Community in Malaya* [1967] は、イスラム社会のなかの中国系移民を扱っており、宗

教的な要素を華僑・華人研究の中でどの様に位置づけることができるか、という課題も依然として重要である。また、関連して、口羽・坪内・前田「マラヤ北西部の稲作農村——農地所有の零細化について」『東南アジア研究』3(1)[1965]、林開忠『建構中的「華文化」——族群属性・国家与華教運動』[1999] などにより、東南アジアにおける華人移民社会が多面的に検討された。

6. 自己の他者化と周縁化——華僑・華人の時代展開と南洋・東南アジアの地域転換

しかし、以下の例に見られるように、異なる主体と異なる対象によって、華僑・華人という表現も極めて異なっている。しかし、それらを以て、華僑・華人問題は、「状況的」とであると指摘するのみでは、これまでの事情研究のなかの華僑像や、ビジネスに特化したとする華僑像とあまり異なるところは無いという点も留意せねばならないであろう。

さらに、空間的・地域的な範疇から華僑を位置づけようとするとき、華僑と華人、南洋と東南アジアという異なる表現の組み合わせが、歴史的な華僑・華人像の転機とその転換を意味している。すなわち、中国から見るならば、華僑は歴史的には早期に移民したグループとしてありながらも、中国との近接性はむしろ高いといえるのであり、時代的には新しい「華人」という表現は、それが東南アジアで生まれ育った華僑第二世代であり、現地における帰属意識に支えられているという意味において、本国との近接性は薄く距離は遠いと言える。そして、これらに戦後冷戦時代のアメリカの東南アジア政策と東南アジア各国の国家形成の文脈を加え、地政的・空間的に示したものが、「南洋」と「東南アジア」の区別を意味することになる。これを示すと、以下のような組み合わせとなる。

	華僑	華人
南洋	南洋華僑	南洋華人
東南アジア (中国)	東南アジア華僑 (華南方言グループ)	東南アジア華人 (中国人)

この中で、華僑・華人の側から見た場合、南洋華人は、むしろ移民先における帰属意識を前面に出した表現であり、これらの組み合わせは、時代状況によって、そして何よりも、華僑・華人の主体をいずれの側面から把握するかによって異なるといえる。また、華僑という表現は、移民先においても移民元の国籍を有する場合に使われ、華人は、他方では、現地の国籍を取得し、いわゆる現地化した場合に用いられる。基本的には、いわゆる現地化の程度あるいは本国との政治的な距離を表す呼び方であるといえる。

この問題の展開について、李元瑾主編『新馬華人——伝統与現代的対話』[2002]、陳嘉榮・

張英杰・施宝美・曾雄威・陳春燕『新新關係——看新山人如何新加坡』[2001]、吳華編著『馬新海南族群史料匯編』[1999]などの研究をあげることができる。そこでは、シンガポール・マレーシアの華僑・華人研究の側からの地方的な視野ならびに関心とアイデンティティの展開を見ることができる。

7. 華僑研究のなかの地域研究

いま、「東南アジア」研究と「華僑・華人」研究を組み合わせようとするとき、そこには(1)どのような既往の研究蓄積と議論が存在しているのだろうか。また、(2)現在これらの研究対象にはどのような問題状況があり、そしてさらに、(3)今後どのような研究の新たな視野を開拓することができるであろうか。これを簡潔に以下の3項目において整理しておきたい。

- (1)「華僑・華人」という研究テーマを「東南アジア」という地域において吟味することにより、テーマそれ自身がよりいっそうの具体性を持って登場してくると同時に、それ以上に「東南アジア」という地域枠組みが再検討を求められると考えられる。例えば、華僑・華人の移民やビジネスのネットワークは、決して東南アジア地域に限られるものではなく、また、方法的にも、ディアスポラや跨域的・跨国家的なあり方は、「東南アジア」として地域を括ったときの閉鎖性、限定性に対して問題を投げかけることになる。地域としての東南アジア研究は、「東南アジア」であることを示すことに急ぐあまり、その東南アジアそのものが実は、内外の「非」東南アジアからの形成態であることが、排除されてしまうこともあるといえる。
- (2) 他方、「東南アジア」と「華僑・華人」を結びつけることによって、「東南アジア」という「地域」研究枠組みが持つ問題枠組みが「華僑・華人」研究に投影され、それによって後者の議論がより対象化され、問題がより鮮明になされるという側面が考えられる。例えば、華僑が東南アジア各国のどのような華僑政策のもとに位置しているか、また、中国大陆・台湾・香港などとどのような関係にあるか、などという課題である。地域の内外画分と対外関係が扱われる領域である。この点は、より広く位置づけられる「華人」の範囲を検討することから議論が深められよう。そして、そこでは、「架橋」研究としての「華僑」研究が問われることになる。
- (3) 第三に、「東南アジア」ならびに「華僑・華人」という研究対象の双方が、両者を対比し対照化させることによって、自らのこれまでの問題枠組み、課題設定の特質、研究蓄積のありかた、方法的また理論的な問題へのアプローチなどにわたって、自己自身を再検討することを迫ると同時に、両者を「解体」しながらも、さらに新しい広い複合的な「問題群」と分析の枠組みを準備するという課題領域である。

以上の「地域」をめぐる三つの討論課題の中では、第三の課題を意識的に追求し、いわゆる「専門」領域、「専門」テーマであると否とを問わず、むしろ、問題の内と外との双方向から検討することが求められていると考えられる。

8. 日本と東南アジア

これらに加えて、むしろ、研究の立場を問われるものとして、「日本」をどのように位置づけるか、という点をめぐっても、華僑・華人問題は重要な問題接近の手がかりを与えてくれる。それは、さしあたり、二つの側面から検討される。すなわち、1) 日本のなかの華僑・華人というテーマと、日本における華僑・華人研究というテーマである。東南アジアを必ずしも単一の地域的なまとまりとしてのみ考えない以上、そこに多様に係わってきた「日本」の地域性も同時に問われることになると思われる。そこでは、「日本」の地域性をどのように多様なものとして認識するか、という点も、「地域」を考える場合の大切な検討項目であると思われる。そして、この点では、九州から関西にかけた福建や広東のネットワーク、さらには琉球から東南アジアに跨った福建（閩人）ネットワークなど、華僑・華人という領域が日本を超え、外に跨った歴史的な地域性と地域連関に関する課題を提起していると考えられる。

この点を歴史的に見ると、「南方研究」としての東南アジア研究ならびにその中における華僑研究が存在した、あるいはしたはずであった。そこでは、20世紀初頭から台北帝国大学が極めて重要な役割を果たしたといえる。台北帝国大学文政学部史学科は、国史学（日本史学）に中村喜代三教授・小葉田淳助教授、東洋史学（アジア史学）に桑田六郎教授、青山公亮助教授、南洋史学に村上直次郎教授、岩生成一助教授を擁する研究環境を持っていた。しかし、ここでは華僑そのものが研究対象となったとは言うことはできない。卞鳳奎訳『中村孝志教授論文集 日本南進政策與台湾』[中村 2002]によれば、むしろ、台湾総督府の南洋政策として、そのなかでの華僑研究が1940年代から急速に進められるようになった（井出季和太『南洋と華僑』[1940] など）、と捉えることができるのであり、これら、村上直次郎、岩生成一、小葉田淳、河野六郎、曹永和の研究のほかに、内田直作『東南アジア華僑の社会と経済』[1982]、岩武照彦『南方軍政下の経済政策——マライ・スマトラ・ジャワの記録』[1981]、同『南方軍政論集』[1989]、矢野暢の日本の南進論、河原林直人の南洋協会研究、などを挙げることができるが、今後、この領域において、華僑・華人研究に不可欠の「双方向性」の視点がいっそう強く求められていると言えよう。

むすび——日本における華僑研究

内田直作は著書『東南アジア華僑の社会と経済』[1982]の「むすび」において以下のよう

に述べている。

本書題するところの「東南アジア」といいながら、なおインドネシア・フィリピン・マレーシアの重要部分は一応実態調査したが、ここに精細に展開する余裕もなく、他の機会にゆづったことは心残りである。

華僑は東南アジアの諸国にもれなく介在しており、土着の人種のほか外来の欧米資本、インド人、ときにはアラビア人などの多民族の複合社会、ないしは多人種社会を構成し、歴史的に相違した文化生活を重ねてきた人種の対立をみ、宗教的・社会的・経済的に各種の角度から問題をひきおこしている。(中略)

筆者は今夏(1982)東南アジア旅行の際、マレーシアのクアラルンプールの書店で購入した現マレーシアの四代目の首相=Mahathir bin Mohamadの著書の“The Malay Dilemma, Petaling Jaya, 1982”を旅中一読して、同首相の土着人=Bumipêtraとしての立場からの強烈な華僑、イギリス資本への徹底的批判に接し、マレー人の著書としては初めてではないかとさえ大きく感動させられた。同書をよんで、筆者は本書のうちに土着人側の立場に十分に触れなかったことに気づかされた。この意味でも本書は幾重にも不備であり、未完成であることを認めねばならない。同首相は“Look East Policy”を宣言し、西洋ばかりでなく、東方の日本と韓国との提携へと方針を改めていかなければならないとし、研修生150名程度派遣(1982・9)のほか、十月中頃(1982)来日の予定のところ、日本政変のため延期されたが、是非今後来京され、国際的にも相互の理解を深めていくべきことは、鎖国的であり勝ちであって、海外への理解の少ない日本のとるべき道であると考えさせられている。筆者個人にとっても、なお発表すべきものは多く残されている。是非その発表の機会を実現させたいと期している。多人種社会ないしは複合社会の問題点にふれえなかったことを深くおわびしておく。

ここには、華僑を現地の文脈において位置付けてこなかったこと、そして、その現地の文脈とは「多民族の複合社会、ないしは多人種社会を構成し」ていること、そしてこれらが無視されてきたこと、さらに、その「現地社会」では、民族主義・民族的自信が澎湃として沸き起こりつつあること、そして、それらを無視して進めてきた自らの華僑研究・東南アジア研究について、現地の人々に対する「お詫び」で締めくくられている。

極めて印象深い文章であるが、この表明を日本における華僑研究の、また東南アジア研究の戦中世代の良心であると受け止めるならば、われわれ戦後世代は、どのような研究姿勢を論ずべきであろうか。

このようにして、日本における第二次大戦を画期とする、また東南アジアと東アジアとの地

域連関に関する研究の断絶面は、これまで、東アジアの中の日本という視点を欠いたまま、日本と南洋・東南アジアとの関係に限定するものが多いという意味において、また、日本における華僑・華人に関する研究成果が、日本における華僑を含むことなく、中国・東南アジアにおける華僑・華人研究にのみ特化してきたという二重の意味における断絶でもあったということに気付かされるのである。

文献・資料解題

在日本の華僑・華人研究資料に取り組んだ特徴的な研究として、長崎華僑商店「生泰号」や「泰益号」に関する本格的な研究が公刊された。また神戸華僑ならびに横浜華僑に関する研究も着実に行われているといえよう。また近年の横浜中華学校や商工会議所に関連する資料集を含めたものについても特色ある華僑・華人研究がなされている。

山岡由佳 [1995]、朱徳蘭 [1997]、廖赤陽 [2000] らによる泰益号の族譜や帳簿に関する膨大な調査に基づいた研究の成果として博士論文が公刊され、王維らによる、在地の華僑性に関する調査研究も注目される。安井三吉の「アジア歴史資料センター」〈<http://www.jacar.go.jp>〉の資料検索に基づく研究 [2005] も新しい資料研究の方向を示しているといえるであろう。また、王珂編『阪神華僑の国際ネットワークに関する研究』 [2005] も注目される研究である。

1. Aihwa Ong and Donald M. Nonini, ed. 1997. *Ungrounded Empires: The Cultural Politics of Chinese Transnationalism*. New York and London: Routledge.

本書は、19世紀までの華僑・華人移民が、東南アジアを中心としていたことに対して、20世紀にはそれに加えてオーストラリア・アメリカへの移民と、それに伴う新たな国際的移民問題が登場してきたことを総合的に議論し、それを、トランスナショナルという視点から論じている。近代性・宗族・国家・アイデンティティなどに分類された論文集である。

2. Tan Chee-Beng. 2004. *Chinese Overseas: Comparative Cultural Issues*. Hong Kong University Press.

本書は、マラヤ大学においてババの研究を行い、また、華僑・華人の社会的地位の変化なども積極的に論じてきた著者が、香港中文大学における文化研究を中心にまとめた専著である。食文化や言語問題など、華僑・華人社会に関する広い範囲に及ぶ、文化人類学からのアプローチである。

3. 原不二夫. 2001. 『マラヤ華僑と中国——帰属意識転換過程の研究』(南山大学学術叢書) 龍溪書舎.

マラヤは、華僑・華人が最も早期に移民した地域であり、華僑・華人研究も、星馬（シンガポール・マレーシア）研究とも呼ばれるように、重要な地域である。本書は、戦前から戦後にかけて、マラヤ華僑・華人の帰属意識の展開が、イギリス時代、日本時代、戦後の独立時代という変化に応じてどのように転換したかを明らかにする。

4. 蔡志祥編. 2003. 『乾泰隆商業文書』(香港科技大学華南研究中心, 華南研究文献叢刊(四) 許舒博士所藏土地及商業文書) 華南研究出版社.

本書は、香港科学技術大学華南研究センターが編集した、華僑・華人企業経営に関する資料叢書の一冊である。原資料に基づいて、初めて、宗族結合とそのネットワークが、具体的な華人商業経営として進められているということを実証する研究を可能としており、資料研究を重視する点において、歴史人類学という領域も開拓されている。また、関連する資料は多いが、一例として呉華編著『馬新海南族群史料匯編』(馬來西亞海南會館聯合会出版, 1999) がある。

参考文献

- 察佩蓉. 2002. 『清季駐新加坡領事之探討 (1877-1911)』新加坡国立大学中文系・八方文化企業公司.
Chaudhuri, Jayassri Ray. 1993. *Migration and Remittances: Inter-Urban and Rural-Urban Linkages*. Sage Publications India Pvt Ltd.
陳嘉榮; 張英杰; 施宝美; 曾雄威; 陳春燕. 2001. 『新新關係——看新山人如何新加坡』土司工作室.
陳天璽. 2001. 『華人ディアスポラ——華商のネットワークとアイデンティティ』明石書店.
方金英. 2001. 『東南亞「華人問題」的形成与發展——泰國・菲律賓・馬來西亞・印度尼西亞案例研究』時事出版社.
古田和子. 2000. 『上海ネットワークと近代東アジア』東京大学出版会.
Gosling, Peter L.A.; and Lim, Linda Y. C., eds. 1983. *The Chinese in Southeast Asia*. 2vols. Singapore: Maruzen Asia.
濱下武志. 2003. 「交差するインド系ネットワークと華人系ネットワーク——本国送金システムの比較検討」『現代南アジア6 世界システムとネットワーク』秋田茂; 水島司(編) 所収. 東京大学出版会.
Hamilton, Gary, ed. 1991. *Business Networks and Economic Development in East Asia*. Centre of Asian Studies, University of Hong Kong.
韓方明. 2002. 『華人与馬來西亞現代化進程』商務印書館.
原不二夫(編). 1993. 『東南アジア華僑と中国——中国帰属意識から華人意識へ』アジア経済研究所.
Hopkins, G.E., ed. 2002. *Globalization in World History*. New York and London: W.W. Norton & Company.
黄昆章; 吳金平. 2001. 『加拿大華僑華人史』廣東高等教育出版社.
井出季和太. 1940. 『南洋と華僑』三省堂.
岩武照彦. 1981. 『南方軍政下の経済政策——マライ・スマトラ・ジャワの記録』汲古書院.
———. 1989. 『南方軍政論集』巖南堂.
口羽益生; 坪内良博; 前田成文. 1965. 「マラヤ北西部の稲作農村——農地所有の零細化について」『東南アジア研究』3(1).
李安山. 2000. 『非洲華僑華人史』中国華僑出版社.
李明敏. 2002. 『欧洲華僑華人史』中国華僑出版社.

- 李盈慧. 1997. 『華僑政策與海外民族主義（1912～1949）』国史館.
- 李元瑾（主編）. 2002. 『新馬華人——伝統与現代の対話』南洋理工大学.
- 廖赤陽. 2000. 『長崎華商と東南アジア交易圏の形成』汲古書院.
- 林開忠. 1999. 『建構中的「華人文化」——族群属性・国家与華教運動』Kuala Lumpur: 華社研究中心.
- 林金枝（編）. 1994. 『近代華僑投資国内企業史資料選輯（上海卷）』厦門大学出版社.
- 劉宏. 2002. 『戦後新加坡華人社会的嬗変——本土情懷・区域網絡・全球視野』厦門大学出版社.
- Maeda, Kiyoshige. 1967. *Alor Janggus: A Chinese Community in Malaya*. The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- 梅偉強；張國雄. 2001. 『五邑華人史』廣東高等教育出版社.
- 中村孝志. 2002. 『中村孝志教授論文集 日本南進政策與台灣』卞鳳奎（訳）. 台湾文化系列25. 稻郷出版社.
- Ong, Aihwa; and Nonini, Donald M., eds. 1997. *Ungrounded Empires: The Cultural Politics of Modern Chinese Transnationalism*. New York and London: Routledge.
- Pehlivanurk, Bahadır. 2004. "Small Worlds" of Overseas Chinese: A Network Science Approach. Ph.D. Dissertation, Kyoto University.
- Pflegerl, Johannes; Siew-Ean Khoo; Yeoh, Brenda S.A.; and Koh, Verene, eds. 2003. *Researching Migration and the Family*. Singapore: Asian Metacentre for Population and Sustainable Development Analysis.
- 丘立本. 2000. 『從世界看華人』南島出版社.
- 重松伸司（編）. 1986. 『現代アジア移民——その共生原理をもとめて』名古屋大学出版会.
- 内田直作. 1982. 『東南アジア華僑の社会と経済』千倉書房.
- 王廣武. 2002. 「華人・華僑与東南亞史」「東南亞華人身分認同之研究」『王廣武自選集』上海教育出版社.
- 王珂（編）. 2005. 『阪神華僑の国際ネットワークに関する研究』神戸大学.
- 王維. 2001. 『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ——祭祀と芸能を中心に……』風響社.
- 汪新生（主編）；喻常森（副主編）. 2005. 『中国—東南亞区域合作与公共理』中国社会科学出版社.
- 温広益（主編）. 2000. 『「二戦」后 東南亞華僑華人史』中山大学出版社.
- Wong Siu-Lun. 1988. *Emigrant Entrepreneurs*. Oxford UP.
- 吳華（編）. 1999. 『馬新海南族群史料匯編』馬來西亞海南會館聯合會出版.
- 徐斌（編）. 2003. 『華僑華人研究中文書目』厦門大学出版社.
- 徐斌；張長虹（編）. 2002. 『東南亞与華僑華人研究論文索引』厦門大学出版社.
- 蕭曦清. 1984. 『中菲外交關係史』正中書局.
- 山岸 猛. 2005. 『華僑送金——現代中国經濟の分析』論創社.
- 山岡由佳. 1995. 『長崎華商經營の史的研究——近代中国商人の經營と帳簿』ミネルヴァ書房.
- 安井三吉. 2005. 『帝国日本の華僑——日本・台湾・朝鮮』青木書店.
- 游仲勲（編）. 2001. 『21世紀の華人・華僑——その經濟力が世界を動かす』ジャパンタイムズ.
- 曾少聰. 1998. 『東洋航路移民』江西高等出版社.
- 鄭林寬. 1940. 『福建華僑匯款』福建省政府秘書處統計室.
- 周惠民（主編）. 2000. 『台湾地区館藏華僑華人研究中文書目彙編』国立政治大學歷史系.
- 庄国土. 2001. 『華僑華人与中国的關係』廣東高等教育出版社.
- 朱德蘭. 1997. 『長崎華商貿易の史的研究』芙蓉書房出版.